

平成二十年

神戸大学経済経営研究所
教授 下村研一

1989年1月7日土曜日。昭和最後のその日、日本では大きな一つの時代の終わりを国民全員が迎えるという経験をした。アメリカにそれまで10年住んでいた方から聞いたことだが、ご本人の記憶では、昭和天皇の崩御は80年代の全米のニュースで日本がトップで報じられた例として初めてだったそうだ。私は子供の頃に戦前生まれの人たちからどこでどのように終戦を迎えたかという話をよく聞かされたものであったが、平成になってしばらくは昭和最後の日にどこで何をしていたかということがよく話題になった。働いていた人たちはほとんど「会社で聞いた」と答えた(当時は土曜の午前中の勤務は極めて一般的であった)。

私は当時大学院の博士課程に在学中。下宿で朝のテレビで知った。その日は大学を退職していた先生の家で新年会が予定されており、参加する院生は大学に集まりお土産を買っていくことになっていた。「新年会は中止かな」という声も出る中、誰も確認しようとせず(当時は携帯電話もEメールもない)予定の時間に間に合うよう山手線に乗った。駅に「平成」という新元号を報じる号外が張り出されていた。新年会は予定通り行なわれた。さまざまな縁で参加した人たちが30人近くいた。「昭和に乾杯」という声が何回も聞かれた。

近年、昭和の日本の経済や政策をさまざまな側面から評価しあう声が聞かれるようになった(NHKで「プロジェクトX」の放映が始まった頃からのような気がする)。戦前生まれ、団塊の世代に加えて、私のような昭和三十年代生まれまで懐古の時期に入ったからだろうと思っていたが、二十代の人達もいろいろ感じるところがあるようだ。年末にテレビを見る機会が多かったが、若い人達の口から「昭和らしい」「昭和の雰囲気がある」という言葉が「純朴」「協力的」「真面目」という意味で語られているのを聞いた。そうか。若い人達は「昭和を知らない子供たち」なのか。平成「二十年」の意味を改めて認識した。昭和が主観的な「過去」でなく客観的な「歴史」として評価されはじめています。

文化、芸術、そしてスポーツの歴史におけるアーティストやアスリートのパフォーマンスを評価することは、それ自体に当時の流行や活躍した人の実績を掘り起こす楽しさがある。そして話題の中心は成功、つまり光の部分である。実際は影の部分を作った人達の方が圧倒的に多いが、文化、芸術、スポーツの話題ではそのような人達に対しては健闘に敬意を表しそっとしておくのが礼儀である。しかし、経済や政策のパフォーマンスの評価はさま

ざまな立場（政府，地方自治体，得する企業，損する企業，得する民間人，損する民間人など）から公平に行なわねばならぬ難しさがある上，評価もそれぞれの出来事から生じた光と影の両方を追わねばならない．文化，芸術，スポーツにおけるパフォーマンスと経済や政策のそれとの大きな違いは，前者は直接の影響が及ぶ範囲が当事者のみ，後者は無関係な人々にも影響が及びしばしば一般人の生活の質を変えるほどであることである．

後者の一例が高度成長期の植林政策である．当時，住宅建設のため日本では多くのスギ，ヒノキが伐採された．そこで政府は次世代のためスギ，ヒノキの植林政策を行なった．ところが，民間の業者により木材が安価で輸入されはじめたため，そのとき植えられたスギ，ヒノキは伐採されぬままになった（「杉の木は残った」）．そして日本に大量の花粉が飛ぶようになり，それが人体に蓄積されたのが花粉症流行の主要因だとされる．私も10年前から花粉症になったが，高度成長期に植林を行なった政府と木材を輸入に頼った業者を責める気にはならない．政府は将来の日本のことを考えて植林を行ない，業者は経済の原理に従い安価な木材を輸入した．昭和の「真面目」の結果なのである．しかし，二つの「真面目」は20年後に想定外の結果を生んでしまった．

平成20年代の到来は，同時に平成1ケタの時期の変革が歴史として評価される時期の到来である．この時期の経済と政策は，自己発生的な現象と政治的な決定の両面からさまざまな変革を経験した．消費税の導入，バブル経済の崩壊，超円高，都市銀行・証券会社の破綻と合併，そしてIT化．これらによる一般人の生活の変化はあまりに激しく影響は多岐に及ぶため紙面の都合で詳細は割愛する．光と影を総合して国民の生活の質が上がったか下がったかの判断は極めて難しい．平成2ケタになると，中央省庁の再編，市町村の合併，そして郵政民営化と続く．これらもいずれ想定外の光と影をまだらに残すことになるろう．

大学に関わる者として経験した平成1ケタの変革としては，センター試験開始や科目削減などを含む入試の多様化，週休二日，大学設置基準の大綱化（教養課程の設置義務の廃止などの規制緩和）がある．変革前の昭和の「真面目」が懐かしい．その後も，改革は大学院重点化，国立大学法人化，法科大学院設置など次々と行なわれ日本の大学は大きく変わった．大学の学部教育・大学院教育を経て社会に出る人々の数は膨大である．改革後20年経てば，それ以降の教育を受けた世代の法律家はもちろん，政治家，役人，医師，技術者，経営者，そして次世代の教育者は日本全国に広がる．彼らが改革以前の人材と比較されることで，平成の大学改革の評価は確実に定まるであろう．その頃の私は丁度大学を退職する年齢である．2026年3月31日火曜日．定年の日「平成の改革に乾杯」は果たしてできるであろうか．